

精神遍歴としての『デイヴィッド・コパフィールド』 ——フロイトの精神分析理論に基づく一考察——

坂 淳一、笹渕アンドレ順

序

ジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) は、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の『デイヴィッド・コパフィールド』 (*David Copperfield*, 1849-50) を愛読し、当時は恋人であった後の妻マルタ・ベルナイスへの贈り物にも選んでいる。⁽¹⁾それは1882年6月、フロイト26歳の時で、彼はまだ勉強中の身であり、精神科医にもなっていなかった。後年、自ら『ドストエフスキーと父殺し』 (*Dostojewski und die Vatermord*, 1929) という文学論を書いているように、フロイトは、精神分析学を文学に応用して論じた最初の人物でもある。ドストエフスキー (1821-81年) もディケンズの愛読者であるから、ディケンズ、ドストエフスキー、フロイトは一直線上につながっているとも言えるのである。ディケンズは1812年生まれ、フロイトは1856年生まれ (1938年からはロンドン在住) であり、ディケンズの方が44年早く生まれている。フロイトが最初の著書『ヒステリー研究』 (*Studien über Hysterie*) をヨーゼフ・ブロイアー (Josef Breuer, 1842-1925) と共著で出版したのが1895年であるから、ディケンズがフロイトの精神分析学から何かを学んだ可能性は皆無である。むしろ、ほどなく精神分析学が生まれてくる時代状況の中で、芽生えつつある無意識への関心を、学説として確立する必要のない小説家のディケンズが、登場人物の心理洞察という形で生かして作品を作り、そこにフロイトが引き付けられたと見るべきであろう。

フロイトの精神分析学も、突然降って湧いたように現れたわけではない。すでに夢に対する関心は、理性よりも想像力を重んじるロマン主義の風潮の中で高まっていた。イギリスでも、『夢魔』 (*The Nightmare*, 1781) で有名な画家のフューズリー (Henry Fuseli, 1741-1825) や、ブレイク (William Blake, 1757-1827)、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) などの詩人は、夢や幻視といった現象に関心の深かった芸術家である。この時代の夢に対する関心の高まりについては、ジェニフ

ァー・フォードが詳しく論じているほか、⁽²⁾19世紀における精神科学 (mental science) の興隆や、それに伴って無意識、夢、狂気や意識の二重性への関心が高まり、ディケンズが1850年代に編纂していた『ハウスホールド・ワーズ』誌 (*Household Words*) でも精神科学のことが何度か取り上げられていることなどを、野々村咲子が論じている。⁽³⁾デイヴィッドが見るユライア殺しの夢 (後に論じる) の描写も、さらにはフロイトの『夢判断』 (*Die Traumdeutung*, 1900) のような研究も、このような夢に対する関心の延長上にある。

精神病治療の歴史を概観してみよう。1800年頃には、イギリスのウィリアム・テューク (William Tuke, 1732-1822) やフランスのフィリップ・ピネル (Philippe Pinel, 1745-1826) による、精神病院改革があった。それまでは、精神病患者は人道的な扱いを受けず、病院では監禁や拘束といったことが普通に行われていた。それを上記の二人が批判し、精神病患者を人道的に扱うようになった。これによって精神病患者は医学的治療の対象となったのである。

その後オーストリアで、人間の精神のエネルギーは生体磁気であると唱え、金属の棒などを使った心理治療を行うF.A.メスマー (Franz Anton Mesmer, 1734-1815) が現れた。彼の方法論はメスマリズム (mesmerism) と呼ばれる。一方、イギリスでは、催眠療法を始めたジェームズ・ブレイド (James Braid, 1795-1860) が現れ、催眠術による神経症などの治療法を発展させた。この催眠療法はフランスのリエポー (Ambroise-Auguste Liébeault, 1823-1904) やベルネーム (Hippolyte Bernheim, 1840-1919) が継承発展させ、「ナンシー学派」 (Nancy School) を打ち立てるに至る。一方で、生体磁気説に基礎を置く催眠療法を行う、同じくフランスのジャン＝マルタン・シャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-93) が「サルペトリエール学派」 (Salpêtrière School) を打ち立て、ナンシー学派と対立した。しかし、1889年にパリで開催された催眠に関する国際会議でサルペトリエール学派の主張は否定され、生体磁気説を基礎とするエスマリズムの時代が終焉する。同じ頃、「アンナ・

O) (Anna O) と呼ばれるヒステリー患者を催眠療法によって治療した、ウィーンの前史に当たる時期にディケンズは執筆活動を行い、後にフロイトを唸らせるほどの心理洞察力を発揮していたのである。

上記の歴史において、ディケンズはメスメリズムと催眠療法が覇権を争っていた時代に生きていたことが分かる。精神医学の歴史において、精神分析の前史に当たる時期にディケンズは執筆活動を行い、後にフロイトを唸らせるほどの心理洞察力を発揮していたのである。

ディケンズとフロイトを結びつけて論じた先行文献はいくつかある。例えば、日本では松本靖彦が『骨董屋』(The Old Curiosity Shop, 1840-41) と『互いの友』(Our Mutual Friend, 1864-65) をフロイトの『快原理の彼岸』(Jenseits des Lustprinzips, 1920) を応用する形で論じ、⁽⁴⁾吉田一穂はディケンズが抱えていた二つのトラウマ(靴墨工場での労働、ステイブルハートでの鉄道脱線事故)が主として『リトル・ドリット』と『二都物語』与えた影響や、アメリカ見聞旅行で始めて独房を採用した監獄を見て、犯罪者の心に傷を残すことを懸念している状況などを論じている。⁽⁵⁾海外でも様々な研究が出ているが、代表的なものは、ウェルシュの『コピーライトからコパフィールドまで』⁽⁶⁾や、ディーヴァーの『死と母親、ディケンズからフロイトまで』⁽⁷⁾などであろう。最近も MLA のシンポジウムにおいて、ディケンズや『デイヴィッド・コパフィールド』と精神分析の比較研究が発表されているが、⁽⁸⁾本論はそれらの先行研究が主として焦点としているデイヴィッドのエディプス・コンプレックスではなく、登場人物たちの超自我形成に重きを置いて、登場人物たちの行動とそこに隠された心理を、フロイトの精神分析理論を応用しつつ解き明かしてみたい。19世紀~20世紀初頭のヨーロッパという共通の時間的・空間的の中で、『デイヴィッド・コパフィールド』とフロイトの理論が呼応し合う様を確認することは、この時代のヨーロッパの精神風土を理解する上でも、また作品理解の上でも、一定の意義があるものと考えている。

1. 前提：フロイトの深層心理学および登場人物たちの状況

それでは次に、フロイトの理論について、本論で

援用する範囲でまとめておきたい。フロイトは、比較的初期の考察では、人間の精神は三つの部分から成り立つと説明していた。意識、前意識、無意識の三領域である。意識は自覚された領域で、ここにある事柄はいつでも思い出すことができる。前意識は、それよりは深いところにある意識で、ここにある事柄は努力しなければ意識することも思い出すこともできない。そしてもっとも深層に無意識の領域があり、ここには本人が自覚することのできない、あるいは自覚したくない、抑圧された意識や、リビドーと呼ばれる性欲動が渦巻いている。

さらにフロイトは考察を続け、人間の精神は全体が一つとして機能するものではなく、エス(英語圏ではイド)、自我、超自我という三つの働きに分かれており、それぞれに役割があるという理解へと進んだ。エスは、人間精神のもっとも原始的な部分で、生得的な欲求によって動く部分であり、リビドーの声に従って人間を突き動かす。例えば、乳児はまだ自我も超自我もなく、エスだけの存在である。そこには社会性というものはまだ存在せず、幼児はただ快原則にのみ従う。

自我は、エスの最も表層にあり、自己が他者とは異なる存在で、他者との関わりの中で生きていることを自覚する過程で生じてくる、一種の社会性を司る機能である。自我の主な仕事は、自己と他者(社会)、あるいはエスと次に述べる超自我の折り合いをつけることにある。人間がすべて自己の欲望をぶつけ合っていたのでは、ホップズの言う万人に対する万人の戦いのような状態になってしまうため、エスを抑制し、他者との折り合いを付けようとする。それが自我の役割である。

そして超自我とは、両親のしつけによって、幼児期に心に形成される規範意識である。小此木啓吾は次のように説明する。

ではどのようにして超自我は成立するのだろうか。超自我は、発達的一段階で、自我が内的に分化して成立するもので、同時にそれは、エディプス・コンプレックスの遺産であり、両親の道徳的影響の内在化された機関である。

つまり、エディプス・コンプレックスを克服する過程で異性の親への近親的な愛着を断念するのは、同性の親の脅かし(去勢の)や処罰への不安、あるいはその愛情を失う不安などのためであるが、その過程で、禁止者としての同性の親が、自我の中にとり入れられる。そして自我のなかにとり入れられたこの父(または母)は、自我(息子また

は娘)を監視し、良心あるいは無意識的罪悪感の形で自我を厳格に支配することになる。そして、このようなエディプス・コンプレックスの放棄と、超自我の成立こそ、その個体が、一個の社会的存在になる決定的な過程である。⁽⁹⁾

こうして形成された超自我は、いわば自我の番人として、人間が規範に従った行動を取るようコントロールするのである。この働きが強すぎると、過度な罪悪感に苛まれたり、うつ病を発症したりすることもあるという。

エス、自我、超自我が適切に機能してこそ、人は円満な人生と社会生活を送れるわけだが、『デイヴィッド・コパフィールド』の登場人物たちは、片親、あるいは両親を幼くして失っている登場人物ばかりである。それはこの物語を、何か欠けた、不安定な人物たちの物語にするための仕掛けであると見ることができよう。以下に、主な登場人物たちの親子関係を表にしてまとめてみたい。

登場人物	父親	母親
デイヴィッド・コパフィールド	×	△(子ども時代に甘い母親が死去)
ジェイムズ・ステイアフォース	×	○(甘い母親)
ユライア・ヒープ	△(学童時代に父親が死去)	○(甘い母親)
ハム・ペゴティ	×(叔父のダニエル・ペゴティが父親代わり)	×
エミリー	×(義理の伯父のダニエル・ペゴティが父親代わり)	×
アグニス・ウィックフィールド	○	×
ドーラ・スペンロー	○	×
アニー・ストロング	×(夫が父親代わり)	○

(○は物語時点で存在、×は不在、△は基本的には不在だが影響は残していることを表す。)

現実問題として、ピーターズが述べるように、ヴ

ィクトリア朝の英国には孤児が多かったが、⁽¹⁰⁾それにしては主要な登場人物の中に、両親そろって健在な者が一人もいないというのは特殊である。しかも、私生児や未婚の母の子のような者もおらず、すべて結婚した両親の片方、あるいは両方と死別した子供なのである。自分と同性の親が生きているのはアニー・ストロングだけだが、彼女の母親は“the Old Soldier(老兵)”と渾名される品のないたかり屋で、アニーを苦しめるだけの存在である。アニー本人とは似ても似つかない人物であり、アニーはこの母親を心中密かに軽蔑し、父親代わりの夫(ストロング先生)を慕っている。アニーは夫について、「あなたは良人でもあり、父でもおありになる」(Chap.45, p.665; 第三巻、455頁)とした上で、次のように語っている。

「あたしがまだ小っちゃな子供時分、初めて、とにかく物を知ったというのは、この人、先生をほかにしては考えられないことなのよ。先生として、またお友達としてね、ほんとに根気よく教えて下さった上に——亡くなったパパのお友達だったってこともありましょう——それで、あたし、初めからなつかしかつたのよ。今あたしの知っていることといえば、この人をほかにしては思い出せないわ。いわば一ばん大事な宝を、あたしの心に注ぎ込んで下さって、しかも、そうした知識の上に、はっきりその人柄を刻みつけて下さったと言ってもいいのねえ。もしこれがほかの人から教わったんだったら、とてもこんな結構な宝にはならなかったと思うの」

(Chap.45, p.667; 第三巻、459-60頁)

アニーの意識の中で、夫は父の代理であることがよく分かる。

女子のエディプス・コンプレックスについては、当然ながら男子の場合とはその愛情が向けられる先も解消の仕方も異なる。フロイトの説明では、女子も始めは母親に愛情を抱くが、男性と女性の身体の違いを知ってから、男根のない自分に劣等意識を持つようになる。母親も自分と同じであると気付いて母親を軽蔑する意識が生まれ、自分をそのように生んだ母親を恨み、その愛情の対象は父親に移る。男子とは異なり、女子は去勢不安にさらされることがないので、思春期に父親とは異なる異性に愛情を抱くようになるまで、このエディプス・コンプレックスは続く、とされている。

アニーの場合は、子供の頃に従兄弟のジャック・

モールドンと恋仲になるという経験をしているが、エディプス・コンプレックスが完全には解消されないうちに父親の友人であるストロング博士と結婚し、いわばエディプス・コンプレックスを解消するのではなく、全うしてしまったのである。そして母親の下世話な言動がいかに自分には辛かったかを皆の前で語り、母親への軽蔑も全うしてしまった。ディケンズにとっては、子供時代の靴墨工場での肉体労働は一生ぬぐえないトラウマであったが、やっと工場から帰ってきた自分を家計のために工場に送り返そうとした母への恨みもまた一生忘れ得なかったことはよく知られている。その恨みがアニーの母親糾弾という形をとって、ここで復讐されていると見ることも出来る。この場面も、大変陰影に満ちた心理劇として解釈し得るのである。

男性の登場人物に目を移すと、デイヴィッド、ジェイムズ・ステアフォース、ユライア・ヒーブは、いずれも父親はおらず、息子を甘やかすだけの母親を持っている点で共通している。ただし、ユライア・ヒーブの父親は彼の学童時代までは生きており、彼は父親から与えられた「とにかく遜って、人にはへいこら頭を下げる」という教訓を、少なくとも表面上は守っている。

それでは、これら三人の父親を持たない息子たちを中心に、フロイトの理論を援用しながら分析してゆこう。

2. 超自我の形成不全—ステアフォースの場合

ステアフォースは、子供時代から父親がおらず、甘い母親に育てられている。母親と金の力で、望むことは何でも叶えられた。デイヴィッドとは異なり、成長過程でミスタ・マードストンのような存在にも出会っておらず、ステアフォースは完全に欲求が満たされた特別な世界に生きてきた。あり余るほどの活力で周りを魅了しながら成長し、生徒たちが日常的な体罰に怯えているセイレム塾でも、彼だけは特権的な地位を与えられ、ほとんど制約のない学校生活を楽しんでいる。ここから予測される彼の精神は、一般的に言えば「甘やかされたお坊ちゃん」ということになろうが、フロイト的に言えば、同性の親による去勢不安が無かったため、エディプス・コンプレックスが克服されておらず、超自我も形成不全の状態にあり、欲動の歯止めが効かず、エスの声に振り回される状態であると言うことが出来るだろう。

こうした歯止めのきかない性格が、やがては彼自

身を滅ぼすことになる。エミリーとの駆け落ちである。それが彼を母親との決定的な不和や、社会的な破滅に追いやることは、彼も承知している。承知していながら、彼にはその欲動を抑えることが出来ないのである。間もなくエミリーとの駆け落ちを実行しようとしているステアフォースが、ミスタ・ペゴティの船の家で夜に火を見つめながら、何かに怯えるようにこう話す場面がある。

「……デイヴィッド、僕は、この二十年ほど、ちゃんとした父親がいてくれればよかったらうにと、ほんとうに思うな！」

・・・・・・・・

「いや、もっとよく導いてもらえたらって、心から思うんだ！」彼は、叫ぶように言った。「もっと上手に自分を導けたらって、心から思うんだよ！」(訳文一部修正)

(Chap.22, p.329 ; 第2巻、210頁)

彼はここで「導く (guide)」という単語を二度使っている。彼には「導き手」がないということが、彼を非常に不安定な人間にしているのである。これをフロイト的に解釈すれば、父親不在のために十分な超自我が形成されなかったステアフォースが、欲動をコントロールすることが出来ず、肥大化したエスに滅ぼされそうな自分を恐れていると解釈できるだろう。彼は自己抑制力を持たず、欲望充足へと猪突猛進するような生き方しか出来ない。彼の名前が“Steerforth (舵を前に切る)”であるのも、そこに理由がある。つまり行き先が破滅であっても、欲動のままに前へ進むことしか出来ないのである。これが父親不在の息子であるステアフォースが、常に抱えている心の不安である。

しかし、ステアフォースが後に嵐の海の中で死んでゆく場面を合わせて考えると、フロイトが1920年になって発表した「快原理の彼岸」⁽¹¹⁾の中で述べた「死の欲動」理論も視野に入れたくなる。フロイトは第一次世界大戦における人間の残虐行為や、外傷性神経症に苦しむ兵士たちが恐怖体験を心の中で何度も反復する様を見て、人間は無機質(無生物)に帰ろうとする死の欲動を持っていると認識するに至った。ステアフォースは自らの中に強い死の欲動が蠢いていることを感じて、自分がそれに飲み込まれることを恐れていたとも言えるのである。死への欲動は自らを死に追いやる力にもなるが、それが他者に向かえば、戦争のような他者に対する攻撃行為にもつながる。フロイトが、この死

の欲動について、アインシュタインへの書簡で説明している一節を引用しよう。

わたしはさまざまに思索した後に、この欲動はすべての生物のうちで働いていて、その生物の生命を奪って、命のない無機物の状態に戻そうとするものだと考えるようになりました。ですからこの欲動は、まさしく死の欲動という名前と呼ばれるのがふさわしいのです。これに対してエロスの欲動は、生物の生きようとする努力を代表するものです。そして死の欲動が自分の特別な器官の力を使ってその生物の外部に、すなわち対象に向けられるときには、破壊欲動となります。生命体はいわば外部のものを破壊することで、みずからの生命を守ろうとするのです。⁽¹²⁾

ステイアフォースは、自分に対して愛情過多なローザ・ダートルをうるさがり、その顔にハンマーを投げつけて一生消えない傷を負わせた。彼のサディスティックな攻撃性は、歯止めのきかない死の欲動が他者に向けて放出された結果とも言えるのである。第七章においても、彼はセイレム塾のメル先生と口論になり、メル先生の母親が養護施設にいることを生徒たちやクリークル校長の前で暴き立て、辞職に追い込む。その冷徹な攻撃性、ネコがネズミをいたぶるように追い込んでゆくその残忍さの中にも、彼の死の欲動の激しさが現れている。

そして最後は、その攻撃性が自らに対してマゾヒズム的に跳ね返ってきて、無分別な駆け落ちに走り、やがては荒れ狂う海へと船を進ませ、自らを溺死の運命へと追い込んでしまうのである。それが超自我の形成不全という精神的欠落を背負わされた、ステイアフォースの運命であった。

3. エミリーの場合：レディ願望と死の欲動

このステイアフォースに、「レディにしてやるから」とそそのかされ、心優しい婚約者のハムも、大好きな叔父も捨てて駆け落ちしてしまうのがエミリーである。エミリーの行動も一見歯止めが効かない欲望に促されているようだが、ステイアフォースと彼女を同列に見ることは適切ではない。彼女の場合、貧しいマーサを大切にしていたこと、子供たちに優しくかったこと、そして何よりも駆け落ちの前も後も、一貫して罪悪感に苛まれていることなどを見ても、ステイアフォースほどに超自我が発育不全な状態とは言えない。超自我なくして罪悪感は生まれぬか

らである。エミリーは、父親代わりの伯父、ダニエル・ペゴティが、甘いながらもきちんと育てた子である。彼女はそれが恐ろしい罪であることを知りながら、ステイアフォースと駆け落ちし、海の彼方へと去ってゆく。なぜ彼女はそのようなことをするのか。それはエミリーが、フロイトが死への欲動理論を生み出す契機となった、外傷性神経症のような状態にあったからと見るのが可能である。今日的に言えばPTSD (Post-Traumatic Stress Disorder : 心的外傷後ストレス障害) ということになる。PTSDになると、自分を心的に傷つけた恐ろしい出来事のフラッシュバックに悩まされたり、感情の範囲の縮小 (例：愛の感情を持つことができない)、未来が短縮した感覚 (例：仕事、結婚、子供、または正常な一生を期待しない) などの症状が現れるという。⁽¹³⁾ せっかくハムと婚約しながらも、彼と暖かい家庭を築いてゆくという明るい未来を希求出来ない彼女の不安定さは、上記のPTSDの症状と奇妙に符合する。

このことを念頭に置いて、初めて少年デイヴィッドがヤーマスを訪れ、エミリーと海辺を散歩していた時の二人のやり取りを見てみよう。

「ねえ、君は船には強いんだろう？」と私は言った。……「ううん」彼女は首を振って答える。「海なんてこわいわ」……「……海って随分ひどいわよ。随分ひどい目にあった人、あたし、知ってるもの。あたしのお家^{うち}くらいある船がね、粉微塵^{みじん}になるところだって見たわよ」

(Chap.3, p.46; 第一巻、73-74 頁)

彼女の心には、人が海に呑み込まれるのを何度も目撃したトラウマがあるのである。それからエミリーはデイヴィッドに言う。

「あんたのパパは紳士だし、ママも立派な奥様なのねえ。でも、あたしのパパは漁師だったし、ママも漁師の娘だったわ。それに伯父さんのダンまで漁師だわ」 (Chap.3, p.47; 第一巻、75 頁)

……

「君は、立派な奥様になりたいの？」私は訊いてみた。

エミリーは、私の顔を見ると、笑いながら肯いた。

「そりゃ、なりたいわよ。みんな立派な人になれたらいいと思うわ。あたしも、伯父さんも、ハムも、ガミッジの^{おば}小母さんも、そうすりゃ、いくら

あらし
暴風雨が来たって、平気だもん——何もあたしたちのためばかりじゃないのよ。あの貧しい気の毒な漁師さんたち、みんなのためよ。怪我でもしたら、みんなしてお金でも上げたいわ」

(Chap.3, p.47; 第一巻、76頁)

彼女はデイヴィッドが紳士の息子であること、自分は漁師の娘であることを気にしている。それは階級意識による部分もちろんあろうが、それ以上に、自分の身近な人たちが、漁師として「こわい海」で生きることを宿命づけられているからである。自分が立派な奥様になって皆を助けたいと、彼女は願っているのである。父を海で失ったという心の傷と、そこから生じたこの願いは、深層心理学の助けを借りるまでもなく理解できる。本人も自覚していることである。だからと言ってその力が弱いわけではない。それをよく表しているのがこのすぐ後に続く次の場面である。

「でも、風のひどい晩などね、ふと目がさめると、ダン伯父さんのことや、ハムのことを心配になってきて、ぶるぶる震えるのよ。そしてなんだか大声で助けを呼んでるような気がして仕方がないの。だからさ、やっぱり、あたし、立派な奥様になりたいのよ。でも、こんなことくらいヘッチャラだわ。ええ、ちっともこわくない。ほら、こんなふう！」

言いながら、彼女は、私のそばから駆け出すと、私たちのいたところからずっと突き出して、相当の高さで海の上にかかっている、手すりも何もない凸凹の材木の上を、軽々と駆けて行くのだった。この出来事は、おそろしく強い印象を私に残した。もし私が絵描きだったならば、今ここでその日の彼女の姿をそのまま、つまり、あの忘れ難い眼差しをきっと沖の方へ向けて、パッと投身自殺をしにかかっているところを（というのは、事実私にはそう思えたからだ）、見事写すこともできたのだろうか。……隠れた啓示というようなことがよくあるが、あの日エミリーがとった突然の行動、そして妖しいまでに沖の方を見つめていた眼差し、何かそこには、彼女を死へと誘う慈悲の力とでもいったものがあったのではなからうか？

(Chap.3, p.48; 第一巻、77-78頁)

風のひどい晩には、ダンやハムが大声で助けを読んでいるような気になるというのは、厳密な意味でのフラッシュバックではないかも知れないが、家族を

失った恐怖体験が甦っているということは事実である。そして、彼女を投身自殺のような行為へと駆り立てる「死へと誘う慈悲の力」、これが彼女を突き動かしている死の欲動である。海がこわいと彼女は言うが、自分のために海を恐れているのではない。父を殺し、伯父やハムを脅かし続けているから海が恐いのである。彼女の矛盾に満ちた捨て身の行動はここに起因している。みんなを助けなくてはという気持ちが超自我の命令のように彼女に迫り、レディになりたいという虚栄心と入り混じって、彼女は海の彼方、つまりは破滅の方角へと、ステアフォースと共に誘われてしまう。このように、この作品において、海は死を象徴する領域である。この場面は、彼女の中の死の欲動が顕現した、まさにジョイス的な意味でのエピファニーの場面と言うことが出来よう。一方で、エミリーの更生やミコーバー一家の再出発は海の彼方のオーストラリアで果たされることを考えれば、海は死の領域だが、その向うには再生の可能性もあるということになる。

ところで、エミリーが駆け落ちしたと分かったとき、残されたハムも海の方を見つめている。

そのとき、ふと、私は、ハムの顔を見た。彼は、じっと、遠い沖の方の光を見つめていたが、瞬間、私は、ある恐ろしい思いに襲われた——彼の顔が、怒りに燃えていたからではない。怒ってはいなかった。私が覚えているのは、ただ、かたく決意を固めた表情だ。——もし今、ステアフォースにめぐり会ったら、生かしてはおかないという決死の表情だった。(訳文一部修正)

(Chap.32, p.462; 第三巻、29-30頁)

……私は、もう一度、ちらとハムの方を見たが、例の表情は、まだ、そのまま、目ははるかに遠く、沖の光を見つめている。私は、軽く、その腕に手をかけた。

そして、寝ている者をでも起こすように、二度も、はっきり声をかけてやって、それで、初めて、気がついたらしい。そんなわけで、何を、そんなに考え込んでいるのか、やっとなんて訊いてみたが、「なに、坊っちゃん、あのずっと向うのね、——それから、まだその向う——」

「これからの生活ってことかい？」というのは、彼は、ぼんやりと、何か沖の方を指していたからである。

「まあ、そうだね、坊っちゃん。わしにも、よくはわからねえんだがね、何か、ほら、あの向うか

ら、来るような気がするんだよね——何もかも、これでもうおしまいってなものが——」何か目のさめぎわとでもいうような目をして、私を見た。だが、あの思いつめたような表情だけは、変りなかった。(Chap.32, p.463-64; 第三巻、32-33頁)

エミリーがステアフォースに連れ去られた海の方角、すなわち死の世界をじっと見つめるハムも、ステアフォースに会ったら生かしてはおかないという決意と、海の方からすべての幕引きとなるような何かがやって来るという予感に囚われている。敵も自分も、共に滅びようとしているのである(後にそれは現実となる)。『快原理の彼岸』を書いた64歳のフロイトが見出した死の欲動は、26歳の時に愛読した『デイヴィッド・コパフィールド』の様々な個所で、既に描かれていたのである。

4. ユライア・ヒープの場合

ユライア・ヒープは実に面白い人物である。大変印象的なキャラクターで、「ユライア・ヒープ」という名のハードロック・バンドがイギリスに生まれたくらいである。ユライア・ヒープは、話しながらヘビのように体をくねらせ、髪は赤毛で眉毛はなく、手は魚のように濡れており、自分は卑しい者ですから、いつも卑下している、実に奇妙な人物である。なぜそのような態度を取るのか、ユライアはデイヴィッドに向かって次のように語る。

「……坊ちゃんはですね、わたしのような身分の人間が、どうして当然卑下したくなるか、ちっとも考えて下さらない！わたしの親父も、わたしもね、二人とも給費学校の出でございますし、おふくろというのが、これもまたね、まあ、いわば公立の慈善学校みたいなところで育ちましたんで。教わることといえば、朝から晩まで、卑下するようなことばかり……とにかく、分をわきまえて、お偉方には、なんでも頭を下げろって、こればかり教え込まれてきたんでございますからねえ。……頭は下げるにかぎる。そうすりゃ、出世はできる。……とにかく、人に可愛がられるのは、これにかぎる。いいか、頭を下げるんだぞって、よく親父が申しましたっけ。……親父は、よく申しましたっけ。世間の人間ってもんは、みんなお前の上に立ちたがってるんだ。だから、お前は、できるだけ下手に出るんだぞ、ってね。それで、まあ、坊ちゃん、わたしはね、今の今まで他人様

には、頭の下げっきりで来たわけでございますがね、それが、今じゃ、やっといくらか力もできましたようなわけで！」

そういう彼の顔を、私は、月の光の中にありありと見ていたわけだが、それは、今こそ年来の復讐を、力で果してやるのだ、とでもいわんばかりの表情だった。彼の卑劣さ、狡猾きわまる悪人振りについては、最初から、私は、一点の疑いも持たなかった。だが、今にして初めてわかったことは、彼のこの飽くない、卑劣な復讐性も、もとをただせば、みんなこの少年時代の長い抑圧から来ているということだった。

(Chap.39, p.580-81; 第三巻、279-81頁)

ユライアは、若くして父を失ってはいるが、学校に通う少年時代には、まだ父親はいたわけである。従って、デイヴィッドやステアフォースのようにまったく父親不在だったわけではない。近藤浩によれば、ディケンズは、この作品を父親のいない主人公の物語とすべく周到な準備を重ねたという。⁽¹⁴⁾それにも関わらず、ユライアには父親の回想をさせているというのは、卑しい父親という「悪い導き手」によって、下げたくもない頭を下げずにはいられないという、有難くない内心の声を植え付けられたことを強調するための仕掛けである。傍から見れば不必要なまでに他人に卑下するという彼の行動も、身分の卑しい父親の不断の躰によって与えられた超自我のなせる技だったのである。フロイトは晩年の考察で、「おそらく、この無意識的懲罰欲求もまた、良心と同じ出自をもち、したがって、内面化されて超自我に継承された攻撃の一部に相当するものと言っているでしょう。」⁽¹⁵⁾と述べている。この「攻撃」とは死の欲動の攻撃性を意味するが、超自我は死の欲動の破壊性を引き受ける性質があり、自分を押さえつける自己破壊的な要素にもなると考えられているのである。ユライアは、「他人には頭を下げろ」という超自我の声と、他人を打ち倒したいという破壊衝動と、アグニスを我がものとしたというエスの声との間で葛藤する、非常に屈折した自我を抱えた人物なのである。

第52章で、デイヴィッド、トラドルズ、ミスタ・ミコーバーに陰謀を暴かれて、もはや卑下しても何にもならないと悟ったユライアは、さすがに(ユングが言うところの)ペルソナを脱ぎ捨て、「いや、もうだいたい前からね、私は、だいたい奴らに頭を下げてさせてきたんだ、ちょうど私自身、昔したようにな！」(Chap.52, p.758; 第四巻、200頁)と不遜

で横柄な本性を現すが、それまではずっと、他人を自分の意のままにしたいという権力欲を悟られまいとして、奇怪なまでに他人に媚びへつらってきたのだ。このように、本心を隠すために、無意識のうちに本心とは逆の行動をとることを、フロイトは「反動形成 (reaction formation)」と呼んだ。

ユライアの性格のもう一つの特徴として、執念深さを挙げる事が出来る。初めて会ったときからデイヴィッドを嫌い、彼を破滅させるために様々な姦計を巡らせたり、ジャック・モールドンに侮辱されたことを根に持って、アニーとストロング博士の間を引き裂こうとしたりする復讐性、さらには金銭に対する執着の激しさ、嫌いな人間を破滅に追いやることに喜びを感じるサディスティックな傾向などは、フロイトの理論では、リビドーが肛門期に固着してしまった人間によく見られる症状である。⁽¹⁶⁾ 肛門期は親による躰が始まる時期であるから、媚びへつらいの態度といい、執念深さといい、躰の問題が彼をそのような人間にしたことをうかがわせる設定である。

肛門期固着の問題に関して、強迫神経症との関連で、フロイトは次のようなことも述べている。

強迫神経症では反対に、サディズム肛門編成という前段階へのリビドーの退行が最も目立つ、病状表出の標準となる事実です。その場合、愛の衝迫はサディズム的衝迫に変装します。お前を殺したいという強迫表象とは、……根本のところでは、愛によってお前を享受したいということ以外ではありません。⁽¹⁷⁾

この傾向がユライアに当てはまるとすれば、ユライアはアグニスを愛で殺すことになるだろう。アグニスに愛情を抱き、彼女を我がものにしようとするユライアをアグニスやデイヴィッドが恐れるのは、彼の愛の衝迫が、彼女をサディスティックに愛で殺したいという衝動に見えるからと言うことも出来るだろう。

ユライアについては、ウェルシュのように、デイヴィッドのドッペルゲンガーと見る見方もある。⁽¹⁸⁾ 確かに、デイヴィッドとユライアの組み合わせは、ジキルとハイドのように一人の人物の表と裏と見たくなるようなところがあり、デイヴィッドのユライアに対する嫌悪は、自分の醜い面に対する自己嫌悪のようにも見える。松岡光治も同様の見方をしている。

……デイケズはデイヴィッドに勤勉さと自助の精神を何度も美化させ、彼の社会的成功を好意的に扱っているが、同じ立身出世主義者のユライア・ヒーブについては道徳に反する卑劣漢として描いている。ここで看過できないのはデイヴィッドが会ったばかりのヒーブに強く引き付けられている点である。これは相手が自分の(悪の)分身であることを無意識に悟っているからであろう。ヒーブから指摘された成り上りの側面がデイヴィッドにあることは間違いない。自分自身の否定的な属性を分身から見せられたからこそ、デイヴィッドはそれをすべて相手に投影して外的なものとして認知しているのである。こうした自己欺瞞的な道徳性の欠如は女性問題にも現れる。デイヴィッドはドーラに対する狂気の愛という自分の「未熟な心から生じた衝動的な最初の過ち」(第四五章)を責めずに、その代わりとしてアグニスに邪恋を抱くヒーブに赤熱の火かき棒を夢の中で突き刺している。この夢と、彼が最終的に現実世界でヒーブの頬に平手打ちを浴びせる場面とは、彼自身の悪の投影による無意識的な罪悪感の処理を読者に暗示しているように思えてならない。⁽¹⁹⁾

デイヴィッドは、常日頃は大人しい青年であるが、ユライアに対してだけは、激しい憎悪と暴力的な衝動を露わにし、夢の中で刺し殺し、現実にも歯が折れるほどに殴りつけるのだが、このことも、デイヴィッドとユライアを別人格と見るのではなく、ひとりの人間の表裏と見た方が自然に理解出来るのである。二人を一人の人間の自我とエスと捉えてみよう。ユライアを許せないと考えるデイヴィッドは自我であり、欲望のままにアグニスを我がものにしようとするユライアはエスである。デイヴィッドから見れば、ユライアの行動はエスの暴走のように見える。これを抑圧しようとして、自我たるデイヴィッドがあらゆる努力をしていると見ればよいのである。二人のぶつかり合いが、どことなく一人の人間の心理的葛藤のように見えるのは、二人の行動はこのように読み解くことが可能だからである。

このような仕掛けが、フロイトの興味を引かなかったはずはないだろう。

5. デイヴィッドの場合

デイヴィッドの幼年期から母親の喪失に至るまでの物語は、エディプス・コンプレックスの典型的な例として多くの論者に語りつくされており、そ

う観点から付け加えるべきことはもう残されていないように思われる。しかし、デイヴィッドの母親喪失は、ただクララ・コパフィールドを義父のミス・マードストーンに盗られ、義父を敵視したが去勢恐怖によって諦めて、母親から切り離されたと考えただけでは済まない面がある。デイヴィッドは、母を義父に奪われたし、義父の罰を恐れもしたが、義父の教えはデイヴィッドの心に入るようなものではなく、デイヴィッドの超自我形成には役立たなかったと思われる。その証拠に、デイヴィッドは、奪われた母を取り戻したいというエディプス・コンプレックスを持ち続け、母クララにそっくりのドーラ・スペンローをその対象に選び、誤った結婚に走ってしまった。彼のエディプス・コンプレックスは超克されていなかったのである。しかしそういう文脈で考えたとき、アグニスとの結婚は一体何を意味するのであろうか。

アグニスは、デイヴィッド少年がストロング博士の学校に入学したときに下宿することになったウィックフィールド氏宅の一人娘で、それ以来、デイヴィッドが困ったときには常に相談相手にしてきた人物である。ドーラと結婚したときでさえ、アグニスの祝福がなければ、結婚の幸福も本物にはならなかったと言っている。アグニスもデイヴィッドを愛しているから、生身の女性として考えれば、自分の愛する男性を奪ったドーラ・スペンローをアグニスが祝福できるわけがない。一般に解釈されているように、アグニスをヴィクトリア朝的な家庭の天使の典型像と見れば、その程度の非現実的な寛大さは許されるのかもしれないが、デイヴィッドを中心に据えてフロイト的な観点から見ると、アグニスは別の機能を果たしていることが見えてくる。

デイヴィッドが初めて（貸家だが）自分の家を持ち、その新居祝いでステアフォースたちと酒に酔ったとき、彼は正体もなく酔ってしまったが、そのこと以上に、こともあろうにそれをアグニスに見られたことの方を気に病んでいる。その時の意気消沈ぶりはひどいもので、翌日アグニスに会ったデイヴィッドは、涙を流して謝罪し、死にたいくらいな気持ちになったと言いき、慰められると、「ああ、アグニス！あなたは、ほんとに、僕の善き天使だ！」（訳文一部修正）（Chap.25, p.374；第二巻、304頁）と言って喜ぶ。アグニスに許されなければ、彼は罪悪感で生きてゆけないということに注意が必要である。その後、アグニスはデイヴィッドに忠告を行う。

「でも、もし、ほんとに、そうだとしたらね、

トロットウッドさん、わたし、ひとつ、お願いしたいことがありますのよ」……「それはね、ぜひ悪い天使を、お避けになるように、っていうこと」（訳文一部修正）

（Chap.25, p.374；第二巻、304-5頁）

アグニスはデイヴィッドとステアフォースの交友の危険性を察知し、彼に警告を發し、彼を導こうとしたのである。私を善き天使だと思えば、悪い天使（ステアフォース）の導きには従うなど、彼女は言っている。ドーラをライバル視しなかったアグニスが、ステアフォースはライバル視しているわけである。従って、本作品を主人公の精神史として見た場合、彼女の本質的なアイデンティティはデイヴィッドの恋人ではなく、彼の「導き手（guide）」である。「善き天使（good Angel）」「悪い天使（bad Angel）」という表現は、ただちに『失樂園』的な天使と墮天使の争いを想起させるが、ここでは「導き手」としての役割を彼女が担っていることが重要である。ステアフォースがあればほどに求めていた「導き手」なのである。

デイヴィッドはアグニスについて、「……彼女は、性格といい、意志といい、私などよりも、はるかに上の人間だった……」（Chap.25, p.378；第二巻、313頁）と述べ、次のように礼賛する。

彼女は、彼女自身まず範を示すことによって、私の心をよき意志、よき決心で充たし、私の弱さを強め、そしてまた、気紛れな私の目的を、きわめて適切に……導いてくれたのである。したがって、私の行なったささやかな善行、そしてまた避け得たあらゆる悪徳は、すべて彼女のおかげだったと、かたく私は信じているのである。

（Chap.35, p.525；第三巻、166頁）

つまり、彼女はデイヴィッドの善悪の判断基準であり、道徳的な「導き手」である。その意味で、デイヴィッドの超自我としての役割を果たしているのである。超自我の役割について、フロイトは次のように述べている。

超自我は、自我理想なるものの担い手でもあり、自我は、この自我理想に照らして自らを測定し、これを規範にして励み、いつまでも尽きることのない完全化を求めるこの自我理想の欲求を満たそうと努めます。⁽²⁰⁾

大人になったデイヴィッドに必要なものは、ドーラ（エディプス・コンプレックスに基づく、母の代理）ではなく、アグニス（超自我的に導く、父の代理）だったのだ。多くの批評家が、アグニスは生身の人間らしくないことを指摘するが、確かに彼女は何かの欲望に駆り立てられたり、嫉妬に苛まれたりすることもない。彼女の役割はヴィクトリア朝的な善を体現することであり、父親のいなかったデイヴィッドに超自我としての自分を与えることなのである。デイヴィッドは、ステアフォースと同様、父親を持たなかった。そのため、十分な超自我が形成されず、怒りに駆られてユライアの歯をへし折るなど、ローザ・ダートルを傷つけたステアフォースにも劣らぬ暴力性さえ見せていた。デイヴィッドも、強いエスと、頼りない自我だけで生きてきたのだ。デイヴィッドがステアフォースという「悪い導き手」に導かれることは、自我がエスに従うことを意味する。それは自己破滅への道である。自分に足りなかったものは正しく厳しい「善き導き手」であることを自覚したデイヴィッドは、アグニスと再婚することでようやく自分を正しく導く超自我を獲得し、エス、自我、超自我のバランスが取れた人間となって、彼の長い精神遍歴は終わりを告げるのである。親友ステアフォースが見出せなかった超自我的な精神の「導き手」をアグニスという形で見出し、主人公デイヴィッドは自己を完成させ、この物語は幕を閉じるのである。

6. 結び

以上、『デイヴィッド・コパフィールド』の主要な登場人物たちとその関係性を、フロイトの理論を援用しながら考察してみた。このように解釈してみると、デイヴィッドの、母クララに対するエディプス・コンプレックスだけではなく、後にフロイトが打ち立てた様々な精神分析理論が、随所どころかなり正確に当てはまることが確認できたと思う。この作品が実際に若きフロイトによって愛読されたことも、決して偶然ではなかったのである。

デイヴィッドが主人公としては印象が薄いというこの作品の弱点も、エディプス・コンプレックスに囚われたデイヴィッドの自我が、母の面影を宿すドーラと結婚しても満たされないと悟り、父から与えられなかった超自我をアグニスと結ばれることで獲得し、自己形成を果して完結する精神史として読むことによって、ある程度納得のゆくものとして捉えることが可能になる。

『デイヴィッド・コパフィールド』は、一見すればただの通俗的なメロドラマにも見えるが、フロイトの理論を通じて考察すれば、そこにはまた違った鏡像が浮かび上がってくる。ジャック・ラカン (Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-81) は、子供は鏡を覗き込むことで初めて自らの全体性を知るという「鏡像段階論」を唱えたが、フロイトという鏡に映る『デイヴィッド・コパフィールド』は、デイヴィッドの精神遍歴という全く新しい全体像を見せてくれたと思う。1850年に完成された『デイヴィッド・コパフィールド』は、20世紀初頭にフロイトによって開かれた精神分析学にも耐える心理洞察を秘め、精神の発展形成の物語として読むことの出来る、時代を半世紀先取りした物語だったのである。

註

*本稿は、長野県短期大学英語英米文化専攻卒業生の笹渕アンドレ順の卒業論文「子としてのディケンズの葛藤」(『2013年度 演習「イギリスの文化Ⅱ」卒業論文集』に収録)を元に、『デイヴィッド・コパフィールド』とフロイトとの関連に的を絞る形で、指導教員であった坂が全面的に書き直したものである。

*テキストには、Charles Dickens, *David Copperfield, With an Introduction and Notes by Jeremy Tambling*, Revised ed. (London: Penguin Books, 2004) を用いた。引用には翻訳書(チャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・コパフィールド』第一巻～第四巻、中野好夫訳、新潮文庫、2006年)を用い、引用頁は、どちらでも参照できるように(原書；翻訳書)の順で併記することとした。ただし、訳文の一部については、原文と照らし合わせて修正すべきと判断した点は修正してある。

- 1) アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』竹友安彦、藤井治彦訳(紀伊國屋書店、1982年)87頁。
- 2) Jennifer Ford, *Coleridge on Dreaming: Romanticism, Dreams and the Medical Imagination* (New York: Cambridge UP, 1998)
- 3) 野々村咲子「ディケンズとコリンズの精神科学」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第26号(ディケンズ・フェロウシップ日本支部、2003年11月)
- 4) 松本靖彦「いずれ死なねばならぬから—フロイトの『快原理の彼岸とディケンズ』」『多元文化』v.11、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編、2011年)67-78頁。
- 5) 吉田一穂「ディケンズと精神的外傷」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』第1巻第2号(近畿大学、2011年)
- 6) Alexander Welsh, *From Copyright to Copperfield: The Identity of Dickens* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1987)

- 7) Carolyn Dever, *Death and the Mother from Dickens to Freud: Victorian Fiction and the Anxiety of Origins*, The Digitally Printed First Paperback Version (New York: Cambridge UP, 2006)
- 8) Peter L. Rudnytsky, "The First Gift: Freud, David Copperfield, and the Sisters Bernays," A Panel at Modern Language Association (MLA) Annual Conference (January 27, 2011)
- 9) 小此木啓吾『フロイト』（講談社学術文庫、1989年）67頁。
- 10) Laura Peters, *Orphan Texts: Victorian Orphans, Culture and Empire* (Manchester: Manchester UP, 2013), p.7.
- 11) ジークムント・フロイト「快原理の彼岸」須藤訓任訳『フロイト全集17』（岩波書店、2006年）
- 12) フロイト『人はなぜ戦争をするのか——エロスとタナトス』中山元訳（光文社古典新訳文庫、2008年）28頁。
- 13) 川上範夫「心的外傷後ストレス障害（PTSD）とは何か」『心を蘇らせる——こころの傷を癒すこれからの災害カウンセリング』河合隼雄編（講談社、1995年）66-67頁。
- 14) 近藤浩「『デイヴィッド・コパフィールド』における父親の不在」『愛知学院大学語研紀要』第28号（1）（愛知学院大学、2003年1月）19-31頁。
- 15) ジークムント・フロイト「続・精神分析入門講義」道籙泰三訳『フロイト全集21』（岩波書店、2011年）141頁。
- 16) ジークムント・フロイト「性格と肛門性愛」道籙泰三訳『フロイト全集9』（岩波書店、2007年）279-86頁、などを参照されたい。
- 17) ジークムント・フロイト「精神分析入門講義」須藤訓任訳『フロイト全集15』（岩波書店、2012年）411頁。
- 18) Welsh, p.143.
- 19) 松岡光治「まえがきに代えて——暴力と想像力」『ディケンズ文学における暴力とその変奏——生誕二百年記念——』松岡光治編（大阪教育図書、2012年）ix頁。
- 20) ジークムント・フロイト「続・精神分析入門講義」道籙泰三訳『フロイト全集21』（岩波書店、2011年）85頁。
（長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科 英語英米文化専攻）
（連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7
TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026）
（平成26年10月1日受付、平成26年11月28日受理）